



普段使いの生物多様性の中での広葉樹林再生

森林総合研究所九州支所 八木 貴信

以下にお示しする文章、実は4年前に、当時勤務していた当研究所の東北支所（岩手県盛岡市）の広報誌に書き下ろしたものです。どういったわけだか当時の支所幹部にはボツにされてしまいましたが、私自身は大変に思い入れをもって執筆した文章でした。内容は、上のタイトルにあるように、地域毎の林産物多様性の原資として生物多様性をとらえる時、家具材や用材がとれる立派な生産林だけでなく、多様な広葉樹林を再生することの価値と、そこに果たすべき生態学の役割について問題提起を目指したものです。ボツになったものの、いつか世に出したいと思いつけていたのですが、願えばかなうというか、今回のワークショップの趣旨に合致するというのでその機会をいただくことができ感謝しています。どうぞご笑覧下さい。

となりのカラハナソウ

からはなそう（唐花草）：雌雄異株のツル性多年生草本。新芽や根を食用。果実で糶を製造。毬果を揉むとビールの芳香。ホップ（セイヨウカラハナソウ）の変種。ホップより苦味が少ない。（写真1）

このカラハナソウ、このように書くとさぞや珍しい草のように思うかもしれませんが。しかし実は本州中部以北および北海道の山野でごく普通に見られる草本で、日当たりが良いとかなりはびこります。せっかく植えた木にからみついたり草刈りが大変だったり、むしろやっかいものとして扱われることが多い蔓草です。

捨てたものではないおらほの裏山

童話「青い鳥」のように身近なものの価値には気付にくいものです。森林についても然りです。世界遺産のようなブランド力に無縁と考えがちな身近な森林にも、実はたくさん宝物があります。例えば、私の職場の裏山もいわゆる観光資源になるような森林ではありません。しかしそこには、上述のカラハナソウを始め、たくさん有用植物が自生しています。その一部を紹介すると：



写真1. カラハナソウ (*Humulus lupulus* var. *cordifolius*) の毬果。今は利用されずに単なる雑草として扱われることが多いが、その有用性は侮れない。



かすみざくら（霞桜）：落葉高木。いわゆる「桜」の野生種の中でもっとも季節が進んでから咲く。開花の頃に麻の種を播くので「麻蒔き桜」とも。樹皮は薬用および樺細工の材料。サクラの名の由来は、山より迎えた「サ」の神（＝田の神）の依り代（クラ）との説あり。（写真2）



写真2. カスミザクラ (*Prunus verecunda*) の花。開花が遅いので花見の季節を引き延ばしてくれる。

くさぎ（臭木）：落葉低木。ピーナッツバターに似た独特の葉の匂いが名の由来。葉を食用および薬用。根を薬用。果実・萼・葉を染料。果実は媒染剤を必要としない青系の植物染料として価値が高い（媒染剤不要の青系植物染料は少ない）。花も美しく、甘い芳香が強い。（写真3）



写真3. クサギ (*Clerodendrum trichotomum*) の花（左上）、果実（左下）、染色のために採集した果実（右上）、果実で浅青色（はなだ色）に染めた絹布（右下）。

またたび（木天蓼）：雌雄異株の落葉ツル性木本。ネコが好むことで有名だが、人にとっての栄養価・薬効も高い。花・果実を食用および薬用（虫こぶの着いたものは木天蓼として有名）。若芽を食用。いずれも生食は辛い。蔓を薬用および編み籠の材料。開花期に



写真4. マタタビ (*Actinidia polygama*)。雄花（左上）、雌花（左下）、白変した葉と橙色の果実（中）。マタタビを与えると性格が豹変するネコもいるので注意が必要（右上）。

葉が白変し目立つのと、半隠芽の冬芽が特徴。人間の娘を食べた熊神の娘が罰によって化生したのがマタタビとのユーカラあり。（写真4）



生物多様性の利用と民俗

私達には身近にある多様な植物を生活の中で様々に利用してきた歴史があり、それは大きな宝です。それを地域資源として活用した例は、いわて銀河鉄道と青い森鉄道の盛岡～八戸間沿線に限っても、ヤマブドウ、サルナシ、ガマズミ果実の商品化など容易に見つけることができます。これらは地域の生物多様性からの経済的恩恵です。加えて、生物多様性の利用の歴史、民俗を知ることには、このような経済的恩恵以上の意義があります。私達の先祖が周囲の自然と結んできた草木悉皆成仏的な関係をそれぞれの地域で知りなおすことで、“かっこいい”都市文明が主張する際限ない成長の必要性というものに対し、私達はこれまでと違った態度をとれるようになるかもしれません。

地域の景観の棚卸し

私達が地域の生物多様性の恩恵を享受するためには、まず私達の周囲の自然が多様であることが大切です。原生林に原生林の生物多様性があるように、里山林、針葉樹人工林、草地、田畑ごとにそれぞれの生物多様性があるからです。また同じタイプの森林であっても、若い林と年とった林では生物多様性は異質なものになります。ですから「最も優れた生態系は何？」という問いに答えるのは困難です。例えば、森林の質に関しても、アケビ細工材料のアケビ蔓は、タニウツギ優占のいわゆる“低質”林のものが上質だったりするのですから（秋田県横手市の職人さん談）。

その上で、地域の景観に存在する様々なタイプの生態系ごとに、森林であれば林齢も区別して、それぞれの生物群集の構造を明らかにすることが大切です。群集構造というのは例えば「その場所には、どれぐらいの数の生物種が生息していて、生物種毎にどれぐらいの数の個体が生息しているか」ということですが、利用を前提とした生物多様性の把握が目的なので、ありふれた普通種が大切です（希少な生物種に関しては利用でなく保全が大切です）。それと同時に、これらの生物種がどのように利用されてきたか、その地域の経験知を記録することが大切です。生態学と民俗学の連携によるこのような“棚卸し”は、古老の知恵を学問の言葉で整理し直す作業でもあります。このような作業による知見、そしてこのような作業自体が、次世代のための地域づくりで必ずや大きな力を持つことでしょう。



アケビ細工の籠（秋田県横手市産）